

# 門浪会会報 2008 年 創刊号

## ご挨拶

門浪会 会長 霜原俊雄（北高8期）



門浪会会報を創刊するにあたり、先ず以って関東、関西、福岡の各支部の皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。有難うございました。今後とも、会報の発行にご協力下さいます様、重ねてお願い申し上げます。

皆さんも、既にご承知の通り門司北高等学校は平成21年3月を以って閉校となります。母校を失った門浪会が結束する為にも、この会報の発行が必要であり、又、唯一門浪会会員の絆の源と成ると考えます。どうか皆さんもこの趣旨をご理解の上、ご協力をお願い致します。

さて、内容について説明します。最初に会報の命名と発行回数ですが、アルファベットのAから始まり、おしまいのZまでの26回（毎年1回）を当面の目標と致します。従って創刊号はAdvance（進む、前進する）と名付けました。そして、26回目はZ・Z・Z……（グウグウ…）鼾をかいて眠りに着いてお終い。その後再び目覚めるか否かはその時の会報委員会に任せましょう。

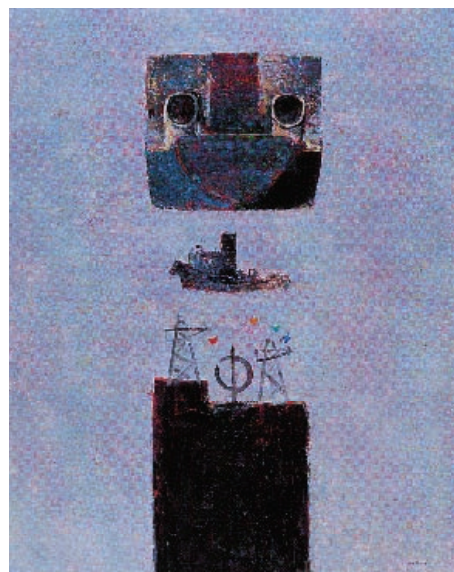
次に構成ですが、第1部は本部記事掲載、第2部は関東支部便り、第3部は関西支部便り、第4部は福岡支部便り、以上4つの部門で構成します。多くの会員、皆さんの投稿をお願い致します。嬉しかった事、感心した事、是非みんなの耳に入れて置きたい事と何でも結構です、

全員の参加をお待ちしております。

尚、この度門浪会会報の創刊に当り、記事を投稿して下さい岡田光由さんを始め多くの皆さんへ心から感謝申し上げます。

本部会員の皆さんへのお願い～本部門浪会は卒業生が卒業時に納める門浪会入会金だけで運営しておりましたが、平成21年度以降その収入が0に成ります。門浪会が今後正常に活動するための財源が必要です。出費多難な折誠に恐縮ですが年会費の納入にご協力下さいます様重ねてお願い申し上げます。

（卒業後10年間は門浪会会費は免除致します）



船出／小島敬三郎

## 新北九州空港よもやま話： 新北九州空港ここにあり ～北九州らしい特色ある空港をめざして～

北九州エアターミナル株式会社 会長 岡田 光由（北高7期）



### ■開港2周年を迎える新北九州空港

新しい北九州空港。平成18年3月16日に開港し、今年3月で、はや2周年を迎えます。

この空港は、小倉南区曾根にあった旧空港が移転し、大型機が就航可能な海上空港として晴れやかに誕生しました。

開港1年目より、「24時間運用可能な海上空港」の強みを活かした「早朝・深夜の旅客便」や「深夜貨物専用便」が就航され、乗降客は予想を大きく上回る「約127万人」。順調な滑り出しを見せました。「スターフライヤーと全日空との共同運航の開始」や貨物拠点化を目指す空港としての第一歩である「初の国際貨物チャーター便によるボジョレーヌーボーの輸送」など新北九州空港が大きく飛躍するための成果を着実に挙げることができました。進化・成長に向けて、今後も様々な取り組みを実施してまいります。

### ■浚渫土砂処分場が生まれ変わって海上空港に ～構想から35年、実現へ～

さて、話は変わりますが、新北九州空港が海上空港として誕生出来たのには、昭和40年代に発案された関門航路の浚渫土砂で生まれる埋立地を将来空港島として利用するといういわゆる「山下構想」があったからだとご存知でしょうか。構想を現実のものとするため、土砂処分場跡地の空港転用、漁業補償、自衛隊「小月基地」をはじめとする空域調整、滑走路の東西案・南北案の対立等数え切れないほどの難題を先人は知恵と努力で乗り切り、昭和52年の着工から約30年という長い年月ののち、港湾事業としての土砂処分場を有効活用し、空港整備事業として新空港を建設した前代未聞の大きな事業をやったのけたのです。

これにより、空港整備にかかる費用は他の海上空港と比べて極めて安上がりとなり、また、関門海峡の浚渫土砂の埋立が半永久的に発生す

るため将来の空港の拡張性への対応が極めて高いポテンシャルのある空港となったのです。

### ■新規航空会社として北九州から羽ばたいたスターフライヤーの存在

新北九州空港が開港と同時に順調なスタートをきれたひとつの要因に「新規航空会社スターフライヤー」の存在があります。

圏域200万人の需要が見込まれ、まだ航空市場としては未成熟で開拓の余地のあった北九州都市圏に目をつけ、北九州に本社を置く新規航空会社スターフライヤーの立ち上げには、地元自治体および地元経済界が積極的に支援しました。スターフライヤーの特徴である、東京(羽田)便1日11往復という早朝から深夜までのシャトル運航、従来にない「黒と白」ボディカラー、「最高のホスピタリティ」の提供する豪華なサービスなどすべてを画期的と思わせる事業展開は、新北九州空港そのものの価値を高めてくれる一翼を担ってくれるものでした。

### ■進化成長するターミナルビル～特色ある空港づくりを目指す～

空港の顔である旅客ターミナルビルは、「小さく産んで大きく育てる」というコンセプトのもと、年間150万人の航空利用者が対応可能な、無駄なものが一切ないコンパクトなビルとして造られています。これからターミナルビルが目指すのは、空港を単なる飛行機の離発着の場ではなく、多くの人が気軽に訪れる賑わいのある空港、そして、北九州の空の玄関口としてふさわしい特色のある空港とすることです。

最後になりましたが、新北九州空港は、今後とも、皆様と一緒に進化・成長していきたいと思っております。これからも、一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。そして、新北九州空港を是非ご利用下さいますようお願い申し上げます。

# 神功皇后の兜ご開帳に寄せて

内山 昌子 (北高10期)



北高を卒業して50年が経とうとしている。家族の転勤の度に職を変え、行く先々で門司港の良さを再認識し、門司港に戻ってきた。

地方にありながら、都会的センスを持ち合

わせ、加えて山や海峡の自然が住環境を快適にしている街門司港はやはり良い。

しかし、五市合併以降、日本銀行をはじめとする企業が次々と門司港を離れ、小さい街ながら全て揃っていると言う利便さが、現在徐々に失われつつある。

すっかり色褪せた街に活気が戻ってきたのはレトロオープン後のことである。このホッ!と安らぎを感じる空間に、新鮮さを覚えた観光客は少なくないだろう。ガイドとして「ふるさと自慢」をして喜ばれる冥利は街の掘起しにはじまる。

今、宣伝しているのは4月、甲宗八幡宮で公開される「神功皇后の兜」、50年に一度のご神体ご開帳は一生に一度の機会だ。我々の同窓会やクラス会も、これに併せて計画されるのだと予測される。

境内には平知盛の墓と伝わる石塔もあって当日はさぞ賑わうだろう。このように関門地区は歴史に恵まれた所だ。

先日、産業観光の観点から小森江の企業を訪れた時、社有地の海岸で鶴の群を発見して驚いた。天正20年、朝鮮出兵のため唐津にいた豊臣秀吉が母の病を知り、大坂へ向かう途中、難所「篠瀬」で座礁した。船奉行の明石与次兵衛は責任をとって切腹、慶長5年、領主となった細川忠興はその死を悼むと共に海の安全を祈って篠瀬に石塔を建てた。

シーボルト著述の「日本」にこの塔の挿絵がある。そこには鶴が描かれているのだ。

場所もこの企業沖、壇の浦の戦いも、いるかの大群が現れ、吉凶を占った故事があるが今も時折いるかが現れるように、海峡に鶴の住む磯

があると知って大変感動を覚えた。

仕事から、よく街歩きをするが、私達の原点である見慣れた風景がどんどん消えてゆくの胸が痛む。

YMCAが壊される時、記録するために学生以来のスケッチをはじめた。美術部にいた訳でも基礎がある訳でもない。けれど、拙い絵に共感して下さる方がいらっしやる。それは、故郷を思う気持ちが共通しているからだろう。

おこがましく画集出版や、ふる里発信の個展をシリーズでやってきた。今年4回目は、失われた風景を中心に、「懐かしの門司港



YMCA 大正5年(1916)

展」を開催した。会場で、思い出話が弾んでいるのを拝見していると、知らず知らず微笑んでしまう。

門司港は変わった。それでも変らぬ空気や風がある。故郷を離れると、その匂いが急に恋しくなるのだ。同級生に説明は出来ない。背景が同じ学舎での生活は、その空白が50年であろうと一気にその時間に戻ることが出来る。

一昨年、音信不通の同級生から突然電話が入り驚いた。たまたまTV出演の私を発見して連絡をくれたとの事、私も彼女を探していたから嬉しかった。50年ぶりの再会を果たしたのは言うまでもない。

甲宗八幡神社の御神体ご開帳、良い機会だ。北高の卒業生が門司港に集合して旧交をあたためる姿が見えるようである。



門司港駅

## 福岡県立門司学園高等学校及び同窓会 ( 仮称 ) に関する硯友会・門浪会合同役員会覚書

- 第1項 福岡県立門司学園高等学校は、福岡県立門司高等学校と福岡県立門司北高等学校が、統廃合され、新設した学校であると認識する。
- 第2項 福岡県立門司学園高等学校同窓会 ( 仮称 ) には、自治の精神を醸成する為、事業計画及び資金計画に関しては、硯友会及び門浪会は、これに一切関与しないものとする。
- 第3項 福岡県立門司学園高等学校の諸行事 ( 入学式、卒業式、体育祭、文化祭、周年行事など ) には、同校の依頼があれば双方から出席しこれを盛り立てる。
- 第4項 以上の取り決めは、必要があれば双方協議の上、改訂することを妨げないものとする。

平成 19 年 12 月 21 日

福岡県立門司高等学校同窓会 『硯友会』 会 長 松 村 隆  
代 理 米 原 稔  
福岡県立門司北高等学校同窓会 『門浪会』 会 長 霜 原 俊 雄



※一昨年硯友会役員と門浪会役員とで5～6回協議し、福岡県立門司学園高等学校及び同窓会 ( 仮称 ) との今後の関わり方を上記の通り締結した。

### ～ホームページ開設のお知らせ～

現在は 100 周年記念の DVD 制作の為更新が遅れていますが4月からは更新を始めます。  
ヤフーで「門浪会」にアクセスして下さい。

## 生きる歓び 歌にのせて

### 奥野まり子 メゾソプラノリサイタル

2008 年

4/13(日)

ウエルとばた・大ホール

開演 14:00  
【開場 13:30】  
全席自由

一 般  
2,000 円  
中高生・障害者  
1,000 円  
( 当日各 500 円増 )

#### -Program -

ピアノ 佐藤美喜  
伝えたい 子どもたちへ  
～教科書から消えた歌～  
この道、初恋、浜千鳥、他

猪本隆の世界  
ぼうさまになったからす  
アフリカの子 他

生きる歓び 歌にのせて  
さとうきび畑 ( 特別合唱団 )  
鶴 ( 特別合唱団 )  
月の光  
誰も寝てはならぬ 他



奥野まり子 ( 北高 23 期 )

北九州市出身、国立音大卒。  
二期会会員・「第九」アルトソロ、  
「カルメン」他オペラにも出演

#### 〈特別出演〉

ゆう遊シンガーズ &  
リサイタル特別合唱団

指 揮 古野千鶴子  
ピ ア ノ 津久間陽子

主催 奥野まり子リサイタル実行委員会  
後援 北九州市、北九州市教育委員会 門浪会 ( 県立門司北高校同窓会 )、財団法人東京二期会  
お問い合わせ 093-951-3463 ( 小森 ) 093-651-5760 ( 渡辺 )

## 関 東 支 部

### ご 挨拶



関東支部長 坂 田 満 生 (北高3期)

私こと、昨年秋、門浪会関東支部長職を仰せ付けられ、自らの非力に不安を感じながらも、共学最初の男子との声に押され、お引き受け致しました。

両副支部長の鈴木澄江氏(門女39期)、高橋一真氏(北高8期)を始め、新運営委員の方々とともに、関東支部の運営に当たりたいと存じます。前支部長吉村キミ様と同様に、同窓各位のご支援とご協力の程を切にお願い申し上げます。

さて、この度、門浪会として初の全国版の「会報」が創刊されることになり、従来まで各支部が発行してきた「会報・便り」などが、統合されることになりました。今まで、門浪会に全国版の「会報」が無かったことは誠に不思議でありました。

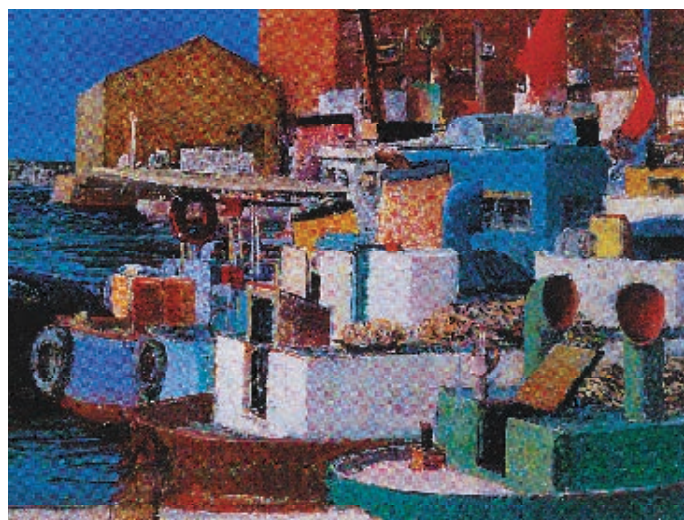
今回の創刊は遅きに失した感はありますが、とにかく、「創刊」を祝したいと存じます。「会報」は、言うまでもなく、全国各地に生活の根を張る会員相互の交流の場であります。新しい会報によって、「門浪会の輪」が広がることを

祈ってやみません。関東支部としては、従来通り、新会報を会員の皆様全員に郵送配布致します。費用については、相当額の増が見込まれますが、会員の皆様のご理解とご協力によって、これを克服したいと考えています。「会報」は会員皆様の支えがあってこそ存在します。

関東支部の皆さん、会費のお振込みをお忘れなく、お願い申し上げます。

関東支部では、創刊号に「記念随想」として5篇を掲載致します。筆者の方々、米国ワシントンより寄稿頂きました北高2期の菅井則子さま始め、門女35期清井早苗さま、門女39期中村信子さま、北高2期今関信子さま、北高8期今田晴三さま、寄稿有りがとうございました。感謝申し上げます。各随想はその時代背景と故郷門司・母校門女北高を原点とする筆者の人生が凝縮されております。まさしく秀作労作であります。ご精読下さい。

ご感想ご意見などお気付きのことは、関東支部運営委員会までお寄せ下さい。お待ち申し上げます。平成20年2月



船溜まり／小島 敬三郎

## 遠くて近き思い出を

清井 早苗 (門女 35 期)



「秋の空清らかに澄んで菊薫る代々木の杜に我ら今……」抜ける様な秋空を眺める時、いつも口をついて出るこの歌は昭和 16・17 年に明治神宮国民競技会

(現国体)に出場した私達が、開会式で斉唱した忘れ得ぬ懐かしき歌です。

前年には 2 位と云う立派な成績を残された先輩の後を次いで、及ばず乍ら団体徒手体操 & ダンスの部で 6 位 7 位と健闘しました。器械体操にも 2 人の個人入賞を果たしました。

体操部に限らず陸上を始め各種球技弓道など、先生の熱意と生徒の頑張りもなかなかのものだったと 60 数年を経て感じ入っています。

芸術面でもお習字の先生の指導のもと、時代を反映して愛国百人一首の掛け軸などを出展した展覧会を思い出します。

80 才を過ぎた昨年古い掛け軸を発見し、当時を懐かしく楽しみました。又音楽活動も盛んで、クラス全員が参加する合唱会や全員がオルガン・ピアノを弾く器楽練習発表会など、先生に恵まれた事を感謝しています。

特筆すべきは鼓笛隊の活動でしょうか。門司は土地柄、出征兵士、傷病兵、遺骨などの送迎に毎日のように出動しましたが、全国吹奏楽競技大会では優勝・準優勝の栄誉に輝きました。小豆色のネクタイが素敵な少女達でした。

凱旋パレードに校旗をかかげて町を行進した私にも晴れがましい思い出が出来ました。

昭和 18 年谷町の校舎とお別れした私達は、門女 35 期生です。昭和 12 年に始まった日支事変に続いて太平洋戦争、世界大戦へと激動の時代でした。門司は特別戦争を身近に感じる所でしたが、そんな中でも福岡県代表として活躍出来た事を、後輩の皆様にもお伝えしたい 60



数年前の古いお話です。卒業後すぐ東京に転居した私は、山もない海もない青い空だけ眺め乍ら、門司を想い友を想い、敗戦後の悲惨さもくぐり抜けました。30 年代からこちらに転任される方が増えて、やっと友恋しの夢も見なくなりました。

35 年に初めて 1 学年上の方 (元関東支部長吉村キミ様の 34 期) 1 年下の方々 (元最高裁判事高橋久子様 の 36 期) と日比谷松本楼でお会い出来た時は本当に嬉しかったものです。

その後発足した同窓会には喜んで出席致しました。同窓会の名が「門浪会」なぜ、モンロー? などと話し合ったものです。在学中からこの学年は“元気がよすぎる”と先生方から睨まれてもしましましたが、今年の百周年記念祝典には 36 名も出席できて、お互いを祝いあう事が出来ました。勉強もさることながら、春は十里行軍・夏は大積での水練・冬は寒中マラソン・雪が降ると突然の雪中行軍、弱音は吐けない厳しいものでした。

共学を知らない門女卒は年を重ねても男子一寸コワイ、純情可憐な昔の少女でもあり、タタキコマレタ品行方正、良妻賢母、何事にも負けない門女魂? そんな気持ちがピタリと通じ合う、嬉しい楽しい仲間です。と云うわけで北高卒の男性様にはイササカの恥じらいもありますがお邪魔にならない様に、母校と門司を懐かしみつつ年をとって行きましょと、関東在住

35期共々におしゃべりに花を咲かせている次第です。

新しい門浪会報発行に当たり関東支部門女卒の一員として、昔日の思い出を綴らせて頂きました。長い人世の中のたった4年間、それなのに、それが私の人生を左右したとも云えるでしょうか…齢を重ねたので過去が特別懐かしく思えるのでしょうか、ともあれ、最晩年に向かっ

てこれからの支えになっていく事は確かです。

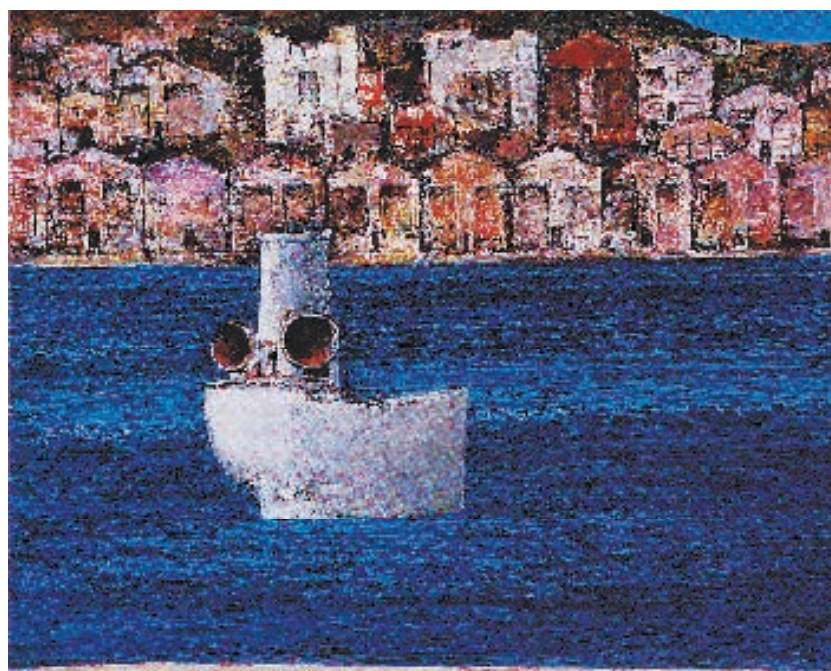
最期にあの戦争中に朝礼のあと斉唱していた歌をお目にかけまして、何かをお感じ頂ければと存じます。

よも 四方の海 <sup>ほらから</sup>みな同胞と思ふ世に  
など波風の立ちさわぐらむ 明治天皇御製

人の世の深き恵に <sup>くにたみ</sup>栄かゆくや我ら国民



昭和35年5月 松本樓にて（門女34・35・36期）



早春の海峡／小島 敬三郎

## 終戦後の門司港で

中村 信子 (門女 39 期)



62 年前 15 歳の少女が駆逐艦で、大時化の中を 43 時間かけて台湾の基隆から鹿児島に渡って来た、と言ったら今ではもう骨董的な話になるのであろう。

終戦翌年の 3 月 21 日朝、頬を切るような冷たい海風に曝されながら、帝国海軍生き残りの「保高」の艦上から、私は火山灰で覆われた鹿児島市を、万感籠めて見詰めていた。「これが母国、日本なのか…」と。

明治 28 年日清戦争後、下関の春帆楼で講和条約が締結されて、台湾は日本に割譲された。

門司港発祥のバナナの叩き売りの口上に出てくる「阿里山麓」とか「台中」「基隆港」の地名も、台湾が日本の領土になったればこそ、のものである。当時はアフリカや南米、アジアの殆どが白人諸国の植民地であった。

私の祖父は遼東半島で建築関係の仕事をしていましたが、近衛師団と共に出発する輸送船団の、指揮官兼通訳の一人として台湾へ向かった。基隆上陸後は兵站部で仕事をしている。

その頃の台湾は瘴癘の地で、マラリア、ペスト、コレラ、脚気等で斃れる軍人軍属も多く、台湾人の抗日運動も激しかった。

日本は治安を確立させながら、衛生状態の改善、教育の普及、道路、港湾、治水などのインフラを整備し、砂糖、米、樟脳や茶の改良育成に力を尽くした。西洋の収奪型とは違う植民地建設に邁進したのであったが、もちろん功績ばかりではない。

私は昨年 3 月と 4 月の 2 ヶ月、台湾南部の屏東県の招聘で、8 人の写真家や作家たちと屏東で暮らしてきた。或る日、台湾海峡に面する「枋寮」の河口に立って、113 年前の 10 月 11 日、乃木希典率いる第二師団と共に上陸した、

30 歳の祖父を偲んだ。祖父は軍用金を預かって「苓雅寮」で兵站部を設営中「台南」無血入城の報が届いて引き返した。

台南で樺山総督から全島の産業調査を命じられ、陸軍参謀と同僚の 3 人で各地を回った。

大晦日は「宜蘭」方面の調査中であつたが、一台湾人から「今夜土匪の反乱が起る」との密告を受け、夜の三貂嶺を超えて基隆に逃れ、命拾いをしたという。

10 ヶ月の軍政時代が終ると、祖父は東海岸唯一の天然の良港「蘇澳」に最初の日本人として定住し、本国から妻子を呼び寄せた。

50 年後、歴史は再び逆転する。中華民国やアメリカなど、世界を敵として戦った日本は惨敗し、海外の領土を全て失った。外地生活者は帰国せざるを得ない。朝鮮や満州に比べると少ないが、それでも台湾からは 40 万近い民間人が帰国している。

母子家庭の我が家 5 人も、祖父と父の遺骨を抱いて国家の運命に従った。

鹿児島本線で門司港へ行く。引揚列車に乗って郊外へ出るや、私は日本の風土の美しさに心魂を奪われた。黒く潤った畔道、見渡す限りの蓮華草と菜の花の畑、所どころ島のように浮かぶ丘は、若草色に萌え立ち、椿の濃緑の葉陰に点々と真紅の花が咲いている。のびやかな淡い青空に薄く刷かれた白雲。南国のダイナミックな風景を見慣れた目に、日本の繊細で絶妙な色調の美は、いくら見ても見飽きず、感嘆し尽くせないものだった。

大牟田市など都市部の廃墟も見た。門司港駅に降り立つと、拾った煙草を吸いながら戦災孤児たちが走り廻っている。駅舎の外は瓦礫の原で、敗戦の厳しい現実を知らされる。

母は住居も定まらないのに、私と妹の門女転校の手続きをとって来た。通学と同時に Y M C A でのピアノレッスンを受けたのも束の間、瞬く間のインフレの亢進は生活を直撃し、一家離散の直前まで追い詰められた。

門女は焼夷弾から守るため、講堂も教室も天井が剥がされていた。本に飢えていたので図書



部に入ったところ、疎開先から梱包されたままの書籍が続々と戻ってきて、読書どころか毎日、本の整理と修理に追われた。初めて見た霜や雪、コンクールのための合唱練習、満足な弁当も持たず、生乾きの服を着て登校したこともある。試験の時でも夜の11時まで店番をしていた。高3の時は母に金策の苦勞をさせないよう、修学旅行の話もせず参加もしなかった。台湾での級友の多くが、引揚げと同時に女学校を中退して働き始めたので、自分が恵まれているとしか考えられない。

4年と専攻科、更に1年進んで新制高校第1回生となり、卒業式を3回続けた。1年後苦学生として東京へ出たが、世間知らずに過ぎた為か、前途に不安を感じた記憶がない。

青春前期の門司港での日々は、引揚者として貧窮に喘いではいたが、戦時圧制からの開放感に溢れ、人権思想は新鮮で、自由を自分の手の中に握りしめていると感じていた。焼跡の栄町

に金山堂書店が新設され、日に日に新刊書が増えていくのを眺めるだけでも、戦争の無い世が嬉しく、心が昂揚したものだ。

喜寿を迎えた今、1回だけの人生を、何を懼れて杵や括弧の中に自分を閉じ込めてしまったのだろう、と思ったりしているので、私はどうも祖父のDNAを受け継いでいたのではなかったか、と思えてくる。

門司港駅  
大正3年（一九一四）建設



## 日々リフレッシュ

今関 信子（北高2期）



「健康は人生の最高の宝物」を提唱し、有酸素運動に取り組んで以来十数年になるが、すでに古希の坂道を下りながらも「朝に夕に、自分のからだの状態の、

からだ気づきを怠ってはならない」と折にふれ訴え続けている。自分のからだは自分で管理し、努力と実践の自己啓発が大事なポイントである。

週の初めの午前中は、市の施設で書道の指導に就いているが、この教室には人生の先輩の90歳の男性が一番前の机で静かに筆を運ぶ姿がある。「そろそろ添削しましょうか」と声を掛けると、ゆっくりと立ち上がって摺り足で

教卓に近づかれる。「さあ手を握って、開いて、前に伸ばしましょう」と、号令口調になると書道師範の私は、即健康体操の指導者に変身する。正しい姿勢で字を書くのも体を操って運動するのも、どちらも脳の活性化と基礎体力をつけるための健康づくりに共通である。

午前中の書道教室が終ると、午後7時から9時までのたっぷり2時間、スポーツセンターでの中高年向けダンベル体操は、会員よりも指導する私の方がはまっている。

40分前には会場に入り、当日のカリキュラムを手早くパネルに書くと、両脇に1kgのダンベルを抱えて2階の廊下から1階に続く階段を駆け下り、廊下を早足で10周する頃には40余名の会員が集まるが、私の足は止まらないまま自然の流れをリードする。“楽しみながら元気になろう！”が私の方針なので骨肉量を増やすための運動に加えて、体力づくりの三原則を説きながら、リズムカルに手足を動かすストレッチ運動に取り組む。

先頃、知・徳・体・食育に、更に歩育を学校教育に導入する提案が発表されたが、子供も大人も歩かなくなった昨今、人間の自立の基盤が足で立つ事にあり、姿勢を正して歩行することで五感を養い、持久力と強い精神力や大脳の健全な発達にも役立つと信じてやまない。八潮市の体育指導委員 23 年の間に健康開発運動に取り組み、元筑波大学鈴木正成教授のダンベル国際シンポジウムにも何度か参加させて頂き、以後この普及のためのボランティア自主活動に燃えている。

しかし現在の最も大きな任務は、埼玉県シニアテニス連盟の常任理事として会員 385 名のテニス活動の企画運営に力を注いでいることである。連盟のシンボルの旗を考案し、役員が着用するユニークな帽子も PC 操作でデザインして、北関東シニアテニス五県対抗や県内大会で活用されているのが、私の一番嬉しい実績でもある。健康維持を目標に、知性・教養・人格の三拍子備えた夢多き老紳士・淑女と活動を共にし、テニス交流で老春を謳歌する日々は実に楽しい。超高齢化社会に向かう今、元気で健康なシニアの目標として県内女子最高齢の立場で、地域の連帯感の醸成をも目指す助力を惜しまない。

且つて私達は門女・北高生であった。戦後の感性豊かな学び舎は、【漸く立っているように思われる古びた校舎から、何処となく戦前の門女らしい厳しさと伝統が残されているような感じを受ける反面、杖に縋り乍ら立っている老婦人のような悲愴感も受けて心から同情を寄せた】(故蒼下朗然先生の『心にうつりゆくよしなごと』から引用抜粋) 恩師の惜しめない愛情とご指導によって、夢のある飛翔に挑戦させて頂いた思春期であり、殻を破った新しいタイプの高校生時代を満喫することが出来たのを特記しておきたい。男女共学を祝う文化祭での歌舞伎十八番勸進帳の舞台で初体験の台詞の言い回しや表現の所作など、真似事の高校生役者に過ぎなかったと今にして恥じるが、師のご指導に従い、純粋で一途な北高生であった事への誇りだ

けは失っていない。一つの事業を成し遂げるスタッフとキャストの結束をこの時代に培ったと自認している。終の住み処となった埼玉に移られてからも、励ましの信書を忘れない師であった。

人間形成の大事なこの時代に、未熟な私達に信頼と期待を寄せ、数多くの試練を学習させて下さった事が着実に自信とプライドにつながり、今日に生かされて、今私が関わる周囲の人達に愛され、慕われ頼りにもされて、各分野でやり甲斐のある感動と感謝の日々を過ごさせて頂いている生の証しになっている。

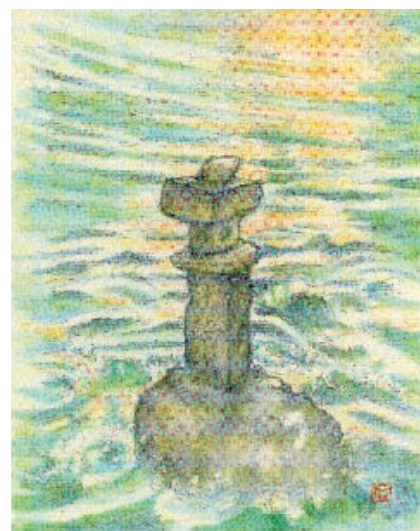
最後に、昨年 9 月 9 日の 100 周年記念祝賀会に参加し、半世紀以上も過ぎて、「あなたに会えて良かった」「君に逢えて良かった」と、師や友人との再会で懐かしさや恋しさが一気に込み上げて来て、今なお母校の思い出や古里還りの病に侵されている。

残された老いの人生に希いを託して、夢と期待を抱きながら、生ある限り私は地域発展のために、市政の振興と住民福祉の向上に貢献したい。内に秘める生命エネルギーを燃やし続け、常にリフレッシュしていきたい。

一門女・北高で関わった皆様に感謝しつつー

残り世の夢のかけ橋はるうらら 信子

平成 20 年早春



和布刈神社 海中灯籠

## 渡米 50 年～私の日々

菅井 則子 (北高 2 期)



北高同窓会の皆様お元気ですか？昨年暮れ、思いがけず私の日常生活について寄稿して欲しいという依頼のメールが飛び込み、いささか戸惑いましたがこれ

までのご無沙汰のお詫びをかねて駄文をしたためてみることに致しました。

私が日本郵船のアリゾナ丸という貨客船で横浜港を後にしたのは昭和 33 年 8 月 20 日夜、サンフランシスコに到着したのは 9 月 1 日の朝でした。あれからちょうど 50 年、女学校 1 年のとき、終戦の日を迎えるまで「鬼畜米英」と教えられ、一途に恐れていた人々の国に、何か不思議な糸で手繰り寄せられた感じできてしまい、心地よく住み着いて半世紀を過ごしてしまいました。

私は現在 (もまだ!) ワシントンにある米国議会図書館の司書として働いています。この職場、幸か不幸か？定年退職制がないのが目下、私の贅沢な悩みの種です。私の図書館就職は 1980 年 5 月、渡米以来の初勤務でした。薬大卒の私にとって図書館は畑違い、経験もなく未知の世界でしたが当時すでに米国市民になっていた私は幸運にもタイピングのテストだけですんなり図書館技師として採用が決まり (そのとき 47 歳)、その後いろいろなトレーニングを受けて 1984 年に専門職の司書に昇格、現在に至っています。1 日の勤務時間は「8 時間」、「9 時間」、「10 時間」と自由に選べるようになっていきますし、朝の出勤時間も 6 時半から 9 時半までの間であれば何時でもよいという規則になっていますのでとても気楽。私は「9 時間」を選んでいきますので一応毎日 6 時半から 4 時までを自分の勤務時間と決めています。通勤にほぼ 1 時間かかりますので週日は 4 時に起き、自

己流の健康法に従って朝食はコーヒー 1 杯とリンゴ 4 分の 1 個、毎朝出かける前に過去 3 年間のその日の日記帳に眼を通すのが日課となっています。

職場につくと直ぐコンピュータを開いて先ずメールのチェック、そのあと朝日、読売、CNN などの速報ニュースにざっと眼を通します。これは私のおつむのウォーミングアップのためで、エンジン? が始動しはじめたらいよいよ本職のカタログの仕事にとりかかり、あとは私のランチタイムの 11 時半頃まで休みなく働きます。仕事の内容は主に日本で出版されて送られてくる日本語と英語の本の目録作り、細かいルールに従ってローマ字と日本語の両方をコンピュータに入力していくのですが常に緊張して注意を怠らないようにしていないと、時にはとんでもない失敗をしでかすこともありますのでおつむの老化防止には何よりの仕事と有難く思っています。

この他にもうひとつ、年に数回ですがボランティアとして日本から公式に訪問される方たちのため館内案内も私の役目です。帰宅はいつも 5 時半近くになりますので夕食にはなるべく時間をかけずにすむよう週末にできるだけの下ごしらえをしておきます。

夕食後はその日の新聞 (ワシントンポスト) と郵便物に眼をおとし、日記をつけたあとは (三日坊主なのにこれだけは感心にもう 10 年あまり続いています) 私のお楽しみタイム、就寝時間と決めている 10 時半前後まで毎晩テープを見て日本のプログラムを堪能します。週末はいわゆる主婦業に専念しますが少しばかり普通の主婦と異なる点は買い物が 1 週間分、週日 5 日分の夕食の準備のためのクッキングに時間をより多く割くくらいでしょうか。その他、私の日常の喜びとなっているものはボランティアワーク、現在は 3 年前から「北鮮拉致被害者救出の会」の一員としてお手伝いをしています。

ボランティアワークにはさまざまな「出会い」があり、学ぶことも多くいつも楽しく充実感を味わえるのが嬉しく、今年は又、来春ワシント

ンでの開催予定の「ある行事」をぜひ実現させるためのお手伝いをしようと張り切っていると  
ころです。

さて「事実は小説より奇？」とか申しますが私のこれまでの人生も数多い「不可思議さ」に包まれた「お蔭様人生」で何時も何か偉大なものに守られ導かれてここまでたどりついたという思いに満たされておりす。

何の因果？か私はこれまでに2度も「銀行強盗」に遭遇してとても怖い経験も致しました。

血液病のため突然緊急入院を命じられた大雪の日の事も忘れられない思いです。がいつも救われ、そのたびに私の人生はよりいっそう豊かに成長したと思わずにられません。

60年近くも前、北高在学中に知り合った平田君との出会い、そして今なお次々と広がっていく「ご縁」～。平田一家との交友をかけがえのない最高の賜物と感謝しつつ、この『縁（え

にし）』とはいったい何なのか、退職したら少し勉強してみようかなどと思ったりもしていません。

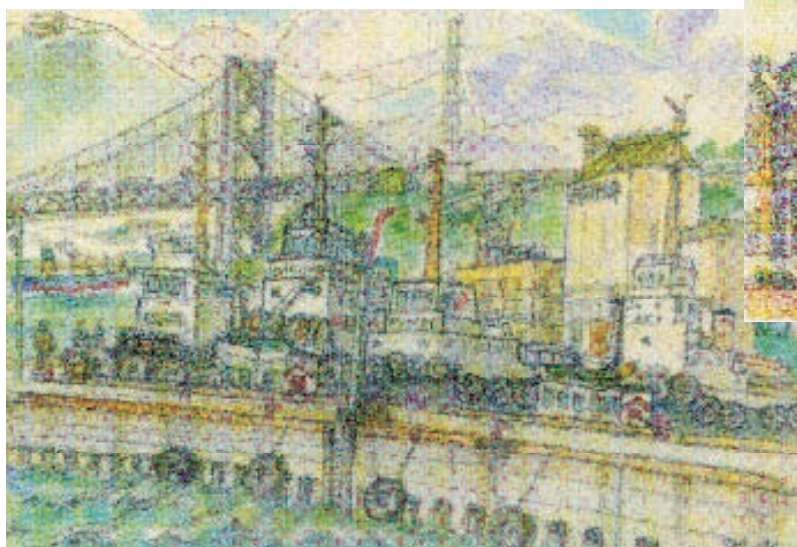
私の余生も後どのくらい？と思うお年頃？になりました。悔いを残すことのないように日々心がけ、常に感謝の気持ちを失わず、この世で受けた恵みの数々を如何にしてこの世にお返ししていくべきかを真剣に考えながら今日も元気で過ごさせていただいています。

皆様方のご活躍とご健勝を祈りつつ～～

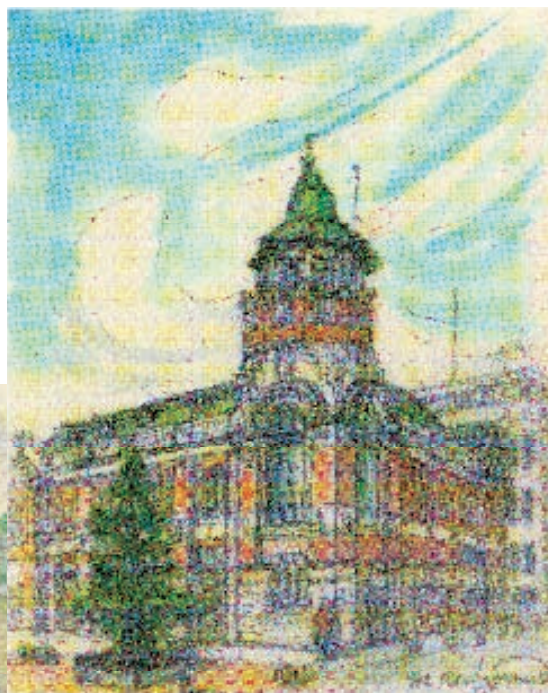
菅井則子（旧姓 織島（おばた））北高2期

追伸

ワシントンへの御出の折は北高3期の平田さんへご一報下されば菅井さんへ取次ぎます。菅井さんがガイドをして下さるそうです。



船だまり



旧大阪商船  
大正6年（1917）建設

## 甲州街道の旅

…悪友との旅は 愚かなるが故に楽し…

今田 晴三 (北高8期)



門司小学校6年1組の4人(霜原俊雄、西山隆征、高橋一真の3君と小生)が、平成19年11月11日より6日間の日程で甲州街道を踏破した。甲州街道踏破といっても、街道に

沿って歩くのは一部であり、街道沿いの各地を起点として、名所、旧跡を訪ね歩く旅である。

甲州街道の起点である日本橋から出発。皇居を巡り終えたところで本降りとなるも、時間にすれば30分程度。結局、雨の日は初日だけで、その後は小春日和の好天続きであった。府中の大国魂神社に立ち寄り、旅の無事を祈願。西の市に七五三が重なり、更に日曜日ということで境内は大変な混雑。八王子泊り。(約21キロ)

甲州路 旅の始めの 日本橋

皇居巡るも 秋雨冷たし

次は、いよいよ今行程中最大の難所、小仏峠越えである。山は登れども、登れども頂遠く、吐く息荒い四爺あわれなり。悪戦苦闘の末、山頂に到達。峠に流れる風は清々しく、遥か遠くに新宿の高層ビルが霞む。降りは登りにも増して苦しく膝が譊々笑う。日本三奇橋の一つである猿橋を経て勝沼へ。村はワインの香漂うような一面の葡萄畑、初日の倍ほど歩いた感あり。勝沼泊り。(約14キロ)

小仏の 難所越えれば 凜の里

疲れし足に 秋色さやか

勝沼から塩山へ。朝日を受けて照り輝く甲斐の山々に言葉なし。町中の諸所に風林火山の旗が林立。多くの民家の軒先には干し柿が幾重にも重なり見事なり。快川和尚の逸話で有名な恵林寺で一休み。塩山から甲府へ。NHK大河ドラマによる信玄ブームで躑躅ヶ崎の武田神社は大変な賑わいなり。また、甲府城のイルミネーションも素晴らしい。ただ、この光の祭典は残念なことに予算の関係で、大河ドラマ終焉の平成19年限りという。なお、甲府城は武田氏滅亡後の築城なり。甲府泊り。(約24キロ)

柿すだれ 風林火山の 旗印

今に伝える 歴史は重し

名峰富士を望み、再度甲府城を訪れ、更に昇仙峡を下る。谷間に虹橋を描き流れ落ちる大滝、兩岸を染める紅葉、奇岩の間を流れる水音などに心を洗われる感あり。甲府から見る富士山は、駿河のとは異なり雄々しい。甲府から韮崎へ。韮崎は甲斐武田氏発祥の地であり、始祖



筆者 左から2人目

信義公の碑を始め、武田氏由来の遺跡が数多く見られる。韮崎泊り。(約21キロ)

男富士 昇仙峡に 甲府城

疲れを癒す 名勝の秋

韮崎から上諏訪へ。甲州と信州では、風景が一変する。甲州が秋本番なら、信州は晩秋なり。途中、野辺山の国立電波天文台を訪ねる。林立する電波受信用のアンテナは圧巻。中でも一番大きい電波望遠鏡は、総重量が700トン、アンテナの直径は45メートルあり、宇宙の微弱電波を受信するため、心臓部は常時マイナス267℃に保たれているという。上諏訪泊り。(約12キロ)

甲信を 隔て聳えし 八ヶ岳

白き冠雪 風心地よし

最終日は、上諏訪から湖畔沿いに諏訪大社がある下諏訪へ。周囲の山々の見事な紅葉に心を奪われる。諏訪大社参拝後、甲州街道の終着点を記す碑の前に到着。(約8キロ)

難行の 旅路の終わり 諏訪大社

紅葉の錦 感無量なり

全行程約100キロ、甲州街道200キロのほぼ半分なり。旅の途中で恩師である松村智子先生に、寄せ書きの絵葉書を送る。

その中の小生の一文

「歩いて、歩いて、歩いて、飲んで、食って、また歩き、更に飲む、悪友との旅は、愚かなるが故に楽し」

## 会報創刊によせて

関西支部長 吉本雅文（北高1期）



平成21年3月、最後の卒業生を送り出し、我々が母校、門司北高等学校はその終焉を迎える。その前身である門司市立門司高等女学校（明治40年設立）以来、卒業生2万余名を世に出した、百数年の栄光ある歴史を…万感交々至る思いである。

森羅万象、有為転変、永久不変なものはない。新しい息吹が萌芽している。新生の県立門司学園を温かく見守っていこう。きっと誇りある門女、門司北の伝統を引き継ぎ、新しい校風を築きあげてくれると確信している。

門浪会は平成21年卒業生を記念すべき年次入会員として迎えよう。誇りを持って胸を張って入会してくる皆を待っている。

門浪会本部は母校を失くした会員相互の絆の源として、本会報を創刊した。

今後の門浪会運営を考えると、資金繰りを含め種々の難問が立ちはだかることであろう。会員諸氏の支援、協力が不可欠となろう。会員が存在する限り、会は不滅である。「終わりは始まり」と位置付けよう。

会報誌の役目、効用は4つある。…と関西支部会報誌「モンロー・ウォーク」（平成9年7月創刊）初代編集・制作者の5回卒小玉文吾氏が創刊号でこう述べておられる。要約して借用させていただく。

『会報は…』

1. 会のポリシーを語り、会員間のコミュニケーションを円滑にする。…会の運営の中核的な役割を受け持つ。
2. 身近な事柄が会報により伝わることで会員相互の親近感が増し愛着が強まる。従って会報の発行が続くことで…会員の結束力が強まる。
3. 会員以外の人に会の存在（活動）を知らしめるものとなる。会報を発行することで会の

信用を高め、会の支援と理解を得るのに役立つ。

4. 会の全般的な活動が記録に残されるので会報の継続的発行は…『記録史』となり財産となる』

と書いておられる。

会報誌の役目、効用についての至言である。しからば、これを如何に実現するか？“仏造りて魂入れざれば”ただの木石、やがて時を経て朽ち果てよう。会報の存続、レベルの維持は会員諸氏の投稿次第である。原稿が集まらなければいかにも有能な編集者といえども、その能力発揮のしようがない。

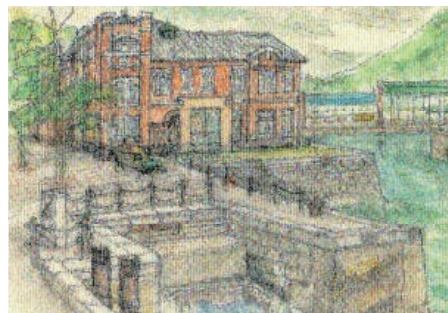
支部会報の発行者として切実な悩みの一つである。本部会報誌編集に携わる方々そして会報発行の楽しさ、面白さを味わってもらえるようにするも、苦悩の奈落に突き落とすも、原稿の集まり如何による。

換言すれば会員の支援、協力の度合いに掛かっている。

参考までに、関西支部会報誌の構成内容は（イ）年次総会報告、（ロ）同期会報告、（ハ）旅行記（ニ）随筆、（ホ）短歌、俳句、川柳（ヘ）特別寄稿

その他何何でも受け付けるということにしている。最後に、再び会員諸氏の投稿、支援をお願いし本部会報誌創刊に際しての挨拶とさせていただきます。

旧門司税関  
明治45年（一九二二）建設



## 関西支部の現況

支部長 吉本 雅文

当会は名簿記載会員数五百五十余名を数え門女卒は13回から40回まで百四十余名、北高卒は1回から44回まで四百余名から構成されている。

その活動は、年1回の総会を中心に、情報発信、会員相互の意思疎通媒体としての会報誌(年1~2回)発行、会員名簿の発行(5年毎に改訂)等を行っている。

しかしながら、最近の年会費納入者比率約40%、総会参加者比率10%以下となり、会運

営の将来を危惧している。でも各期別の同期会は頗る活発な様相を呈している様だ。仲間意識が何処かで繋がっておれば又、何時か同窓会も復活、若年層の参加も期待できると待ち続けよう。

本部会報誌創刊にあたり、支部だより欄を設けるとのことで投稿要請を早くから受けておりました。いかに取り扱うか自問自答、愚考を重ねた結果、創刊号でもあり、本部会員の皆様に関西支部の活動状況の一端でも紹介できたらと思い、支部既刊会報誌「モンロー・ウォーク」から抜粋いたしました。

楽しく、興味深くご覧いただければ幸いです。



## 平成16年 秋 燦々会

伊達 利明 (北高9期)



9月16日から18日にかけて、燦々会の懇親会を関西の地で実施した。47年ぶりに再会して一番に飛び出すなつかしい言葉はなんだろうか。「オーウ」かな「アラー」

かな。何はともあれ、「朋有り、遠方より来たる。亦楽しからずや」に変わりはない。いろい

ろ想像しながら13時、35名(男25名、女10名)の懐かしい顔が琵琶湖のほとりに建つホテルに集まった。

今回は関西組の担当である。日々これ前進あるのみの関西燦々会であるからその内容たるや、納得するところ「大」である。その一部分を紹介しよう。

○9月16日 くもり 午後

まずはホテルから数分のところに建つ近江八景のひとつ「堅田の落雁」で有名な浮御堂に行った。正式には満月寺というのであるが、琵琶湖の安全を願って建立したと言われる堂内には約1,000体の阿弥陀仏が祭られ、思わず手を合わ

浮御堂(満月寺)前にて



さずにはおれない。宿は西に比叡の山々、東は琵琶湖の美しい風景、湖面をわたる風の音も爽やかに心地よさ一杯のホテルである。いろいろ交渉にあたってくれた幹事殿にはただ感謝の一言のみ。夜の部、事前打ち合わせでは、初参加もしくはそれに準ずる人たちを中心に盛り上げていこうではないか、とのことであったが…。ワイワイガヤガヤ、お互い薄れゆく記憶を呼び起こしながらの会話。ハッとする話題もチラホラ顔をのぞかせる場面もあり、現実と過去が行ったり来たりする頭の中を整理しながらの受け答え。今ここに自分があることの幸せを皆さんから与えられているのだなあと思わずにはおれなかった。

○9月17日 曇り時々晴れ

今日の散策場所は「近江商人屋敷」の見学。関西組は二度目であるが、関東組、九州組の面々には近江商人の心意気を思いっきり汲み取って、これから先々いろいろ役立てて貰いたいとの含みもあったのだが…。「諸国産物廻し」や商人のあり方を示した「出精専一」「しまつしてきばる」「三方よし」などの家訓はいまに受け継がれ実行され続けている。それにしても、しまつはすれども「きばり」きれいな自分がいる。

□ □ □

次に今回の目玉「安土城跡」見学。標高199メートルの山頂まで30分の行程。リーダーの「しんどい人は途中で休みながら登っても良いですよ」の心遣いもものともせず、ただ黙々と



安土城跡

登った。ふと、暑い中で運動会の予行練習をしている昔の情景が浮かんで来た。汗をかいている一人ひとりが周りにいたその姿。その顔は学生時代の頃のように輝いていた。しかし、蒸し暑かったなあ。

私自身はそうのように聞こえたのであるが、影の声は「日頃の運動不足が身にしみた」と言ったのだろう（この企画、参加者にはカウンター・パンチとなったのではなかろうか）。リーダーに拍手を贈ろう。

□ □ □

次に「信長の館」の見学。「本能寺の変」の後、数日で焼け落ちた城の天守閣が復元され公開されている。平成4年のスペイン・セビリア万国博覧会に出展された後、この地に移築された。絢爛豪華なつくりは見応えがある。ここで一息入れて、ホテルに帰り昼食。コーヒー・タイムの後、帰郷組と高野山行きとに分かれた。次回開催地での再会を楽しみにバスを見送った。再見！

14時過ぎから14名が車に分乗して一路和歌山の宿へ。素晴らしい日没を期待していたのだが、生憎のガスで展望所からは淡路島は確認できたものの、ぼんやりした四国しか望めなかった。宿は眼下に紀淡海峡、加太の港から漁に出る漁船を一望できる高台にある。夜の部ではかなりの盛り上がりもあったが割愛しよう。明日は8時出発だ。

□ □ □

○9月18日 晴れ、ところにより雨

8時5分出発。途中、道の駅で一服したあと車3台に分乗、標高900メートルの真言密教の聖地である高野山へ。ユネスコ世界遺産登録後は観光客も増え、道路も渋滞気味でうんざりする。予定していた山門や壇上伽藍は車窓より眺めながら金剛峰寺へ。ここでお茶と煎餅の接待を受け講話を聞いた。「物は豊かになったが、心は貧しくなったー感動の心を伝えようー」という内容であった。

□ □ □

11時30分から12時45分。宿坊で精進料理の昼食を。精進とは「悪を断って善を行う、



勤めて励む」とあるが、かしこまって食べた精進料理はいかがなものであつたらうか。ビールの注文も来た。一の橋から奥の院まで1.9キロ。ガイドを頼んだ。樹齢数百年の杉が立ち並ぶその中に、苔蒸した20万基以上の供養塔。そしてわか雨。奥の院御廟前では何を願つたのだろうか。14時過ぎ、中の橋に着いた。皆さんご苦労さまでした。

□ □ □

解散は高野山駅から道の駅へ。高速ICから西へ東へそして北へと、ふるさとを目指して帰途に着いた。2泊3日、行程550km。楽しかった再会劇は終わった。

西からふるさとの香りを運んでくれたその香りが消え失せぬ間に、東から悲しい知らせが入った。

関西支部会報誌『モンロー・ウォーク』  
第11号（平成17年1月）より抜粋



門北燦燦会 平成16年9月17日 琵琶湖グランドホテル



旧三井倶楽部  
大正10年（一九二一）建設  
国の重要文化財

## 門浪会会報発刊を祝して

門浪会福岡支部長 小林 孝 洋（北高9期）



昨年は門女・北高創立100周年の記念行事が盛大に挙行されましたことを門浪会の皆様と共に祝い申し上げます。

母校が100年の歴史を刻み続けて来ましたが、私たち同窓生の誇りであります。

しかしながら残念ではありますが、少子化という時代の流れによって母校も平成20年度をもって閉校となります。現在、多くの卒業生の方々が全国におられますが、母校を失うことは同窓生の核がなくなってしまうことにもなります。

今年度より、従来各支部で発行していた会報を本部で取りまとめられることは、会員すべての方々と情報を共有して、同窓会の絆を深めていけるものと思います。

福岡支部では今回は過去に掲載したもので、他の支部の方にも是非、読んでいただきたい情報を提供いたします。

●となみ福岡 第9号（平成14年）

鐘江敏子さん 北高20期

となみ福岡 第9号（平成14年）

### 「北九州市ルネッサンス構想 門司港レトロ事業について」

鐘江 敏子（北高20期）

門司港に帰る度、変わっていく街に目を見張り、何十年も変わらない家並みに安堵します。

そこで、今までとこれからの街の移り変わ

り「北九州市ルネッサンス構想門司港レトロ事業について」

門司港は北九州市の北の端に位置し、都市経済発展から取り残されてゆきましたが、現在皆さんが観られている観光の拠点として門司港レトロが見事に復興しました。

このルネッサンス構想の貴重な資料を取材してもらいましたので、皆さんにとっても興味深いものと思います。

●となみ福岡 第13号（平成18年）

神川敬三さん 北高11期

「高谷嘉郎先生との思い出」

先生は平成17年12月に79歳で逝去されました。支部の神川さんは卒業以来、永きにわたって師弟関係を暖めてきました。先生を知る卒業生の皆さんは、温厚なお人柄と愛情にあふれる教育者として、「あの人に会いたい」には必ず選ばれる先生でした。

ご冥福をお祈りいたします。

りを調べてみました。

門司港は港と鉄道のまち。かつては、九州の玄関口、大陸貿易の拠点として栄えた。明治22年に国の特別輸出港に指定され、明治24年には門司港・高瀬間に鉄道も開通、大手商社・金融資本の進出もあって、その後半世紀以上、陸・海の拠点として産業・経済・文化全般に亘り繁栄した。が、その後、交通形態の変化（昭和17年関門鉄道トンネル開通、33年関門国道トンネル開通、48年関門橋開通、50年新幹線海底トンネル開通）により、まちは経済発展



から取り残されていった。

しかし、一方で、当時の繁栄を物語るエキゾチックな面影を残す数多くの歴史的建造物（門司港駅、旧門司三井倶楽部、旧門司税関、旧九州鉄道本社など）や、変化に富んだウォーターフロント、美しく雄大な自然景観など魅力ある資源を有しており、これらを生かした街づくりを進めようという構想が生まれた。



国際友好記念図書館

そして、21世紀をめざした街づくり「北九州ルネッサンス構想」の一環として、国の「ふるさとづくり特別対策事業」に基づいた「門司港レトロめぐり海峡めぐり推進事業」が策定された。ウォーターフロント整備の港湾緑地事業など関連する公共事業と併せて、この地域を歴史と自然と文化が融合した「都市型観光拠点」として整備し、活性化を図るとともに人々が親しみと誇りをもてる地域として再生することを目的に「門司港レトロ事業」が始められることになった。

### 門司港レトロ事業（第1期）

＜事業期間＞ 昭和63～平成6年度

＜総事業費＞ 約290億円

＜事業概要＞

#### 1. 門司港レトロめぐり海峡めぐり推進事業

##### ①歴史的建造物保存活用事業

- ・「旧門司三井倶楽部」の移転修復
- ・「旧大阪商船」の修復



門司港駅



はね橋

#### ②レトロめぐり事業

- ・レトロプロムナードの整備・電線地中化

#### ③海峡めぐり事業

- ・めかり回遊路の整備

#### ④観光施設等整備事業

- ・観光施設などへの案内板の設置
- ・レトロ広場の整備

#### 2. 大連歴史的建造物建設事業

#### 3. 西海岸地区再開発事業

- ・港湾緑地等の整備
- ・門司港第一船だまり  
「親水護岸広場」の建設
- 「はね橋」の建設

- ・「旧門司税関」の修復

#### 4. 都市計画道路整備事業

- ・バイパス（清滝・西海岸線）の建設

#### 5. レトロ業務ビルの建設

第1期事業の成果として、観光客の飛躍的な増加〈H6/25.8万人→H7/107.0万人→H8/125.5万人〉、知名度の向上などがあったが、一方で、観光客の滞在時間が短く通過型であることや飲食・物販施設、駐車場・トイレ等の不足という問題点が出てきた。

「観光が地域の産業に成り得ていない」という課題も残った。

これらの成果や課題を踏まえ、今後の門司港地区全体の観光振興について、その方向性や全体像を示す第2期計画を策定、現在遂行中である。

### 門司港レトロ事業（第2期）

＜事業目的＞ 滞在型観光拠点の整備及び快適居住環境の創造

＜事業期間＞ 平成9～平成13年度

〈総事業費〉 公共投資：海峡ミュージアム構  
想を除いて約 100 億円

〈主要事業〉

1. 回遊性の向上及び滞在時間の長時間化
2. 地元商店街の活性化及び民間投資の促進
3. 既存構想の促進・支援（海峡ミュージアム構想、関門海峡ロープウェイ構想）

※海峡ミュージアム

・展示、商業、交流の3部門で構成する拠点文化施設で、現在、税関前の西海岸埋め立て地に建設中。2003年春開館の予定である。

・5階には海峡レストランもオープンする。

※関門海峡ロープウェイ構想

・和布刈公園山頂と火の山公園山頂との間をロープウェイ（長さ1,181m 高低差98m）

で結ぶ構想。

1期、2期を通して計画は、現在までに、ホテル、高層マンション（最上階に展望室）、はね橋、海峡プラザなどハード面では着々と実現しつつあるが、PRによる観光客の導入と地域住民の盛り上がり、商店街の活性化など重要な課題が残っている。

皆さんも、生まれ変わりつつある故郷を見に、たまには帰ってみませんか。

海峡  
ドラマ  
シップ



となみ福岡 第13号(平成18年)

## 「高谷嘉郎先生との思い出」

神川 敬三（北高11期）



昨年12月8日、先生は79歳で逝去された。奥様からの知らせに啞然とし、ことばを出すのをしばらく忘れている自分がそこにあった。先生との思い出は数多

くあり、最近の思い出からさかのぼるほうが、なにかと正確と思う。先生が入院された知らせは、葉書を頂いた6月だった。内容は私が手足の痺れから、近頃握力がなくなったことを電話でお話したことに対して、気になる様子伺いの内容であった。その葉書の最後に現在入院中、治療しているとのことが書いてあった。治療内容は肺に少しの影があり抗がん剤治療に挑戦する旨のことが記されていた。これから病との戦いにむけての気力が書かれていて、先生らしいなど感心した。



御自宅にて H.17.5.7

入院される1ヶ月前の5月の連休に先生宅にお邪魔して、5月18日の「北高11期同期会」が東京・銀座で開かれるのを機会に、先生の近況写真を撮らせて頂き、同期の皆様への手土産にと思ったからだ。

その日は五月晴れの天候で、先生ご夫妻の都合を伺い、私の発案で半日ドライブに出かけることとなった。

コースについては、私が以前から密かに計画していたことで、思い起こすと、高校2年(1959年)の春、生物部に入部し、恒例の新生歓迎

採集登山に部の顧問教師として引率して頂いたのが先生との出会いだった。当時は門司港発6時30分ごろ、東小倉駅（現在は貨物の操車場）で乗換え日田彦山線石原町下車、そこから徒歩で真っ暗なトンネル（櫛ヶ峠隧道）を潜り、道原・頂吉（かぐめよし）貯水池（現在の小倉南区・鱒淵ダム）経由で福智山の登山口到着が10時前後、貯水池の堰堤で休憩し、そこからほんの少し見える福智の頂を眺め登はん意欲が湧いたものだった。この堰堤までのコースをぜひ先生と歩きたかったが、46年前の足腰と違い、体力的に無理と思い、車での散策を再現することとなった。



頂吉貯水池にて御夫妻 H.17.5.7

大里桃山の先生宅から北九州道路で若園インターまで15分、中谷経由で石原町駅まで30分とかからなかった。

車での移動は楽で先生も昔と変わらぬ駅舎を懐かしく改札口を眺めていた。国道に出て山家酒造のわき道に入ると同時に46年前の道がそのまま再現された。周りの樹木が大きくなり舗装されたのと明るさの変化はあるもののそんなに変化はなく、この道でハンミョウを収穫したのを先生もしっかり記憶されていた。

トンネル内は照明がところどころにありいくらか歩きよくなっていた。田圃と里山との畦道をたどりついたところで先生が「この水路に赤腹（ヤモリ）がいて生徒によく説明したものだ」と懐かしがられた。道原（どうばる）から頂吉までの道のりは舗装され完全に昔の面影はなくなっていた。

昭和40年代に小倉市の貯水池と門司市の貯水池2つが合体して鱒淵（ますぶち）ダムが作られその影響で昔あった道原小学校頂吉分校が廃校となり校舎・グラウンド跡が公園となっていた。公園内＝写真＝に車を入れ先生ご夫妻と山菜弁当をいただいた。新緑の公園はバックにコンクリートの堰堤が見上げる格好でそびえ、福智の頂は望めなかったが、公園内にある植物の名前を教えていただきながらの50年前の先生の姿が甦っていた。当然、私も少年時代に戻っていた。

菅生の滝までの道のりも懐かしく、三岳梅林・田代経由で河内の貯水池（メガネ橋）に入りダムサイドの桜並木を眺めながら大蔵（旧電車道）に下り、七条から新日鉄高見社宅跡地の変貌振りに驚き、金比羅公園（北九州市立美術館）・夜宮公園を通過中、奥様から意外な言葉をお聞きすることができた。それは「この交差点であなた（高谷先生）に初めてお会いしたのよね」…私はびっくりして言葉の真相を確かめたところ、当時先生は戸畑高校にお勤めで門司港から通勤され、奥様は反対側の夜宮公園裏手にあった自宅から戸畑高校に通学されていた。この交差点が初めて出会った場所とお聞きし驚いた。お二人にとっては約50年前の思い出だったようだ。

約4時間の「市内思い出ドライブ」であったが、先生夫妻に喜んでいただいたことは、今思えばあの時実行していてよかった、1ヶ月遅れていては実現できなかったことだと思った。このドライブの終わりに「この次は夏の久住に行き、天然のクーラーを満喫しましょう。高速で行けば3時間で飯田高原に着けます」とお誘いしたことが実現不可能となったことが残念でならない。まだまだお元気であれば霧島、高千穂の峰などにも案内できたのと思いつつ先生のご冥福をお祈りする。

合掌

# 事務局だより

## 100周年記念品タオルについて

昨年9月9日の門女・北高創立100周年記念行事は、750の方にご出席戴き小倉のリーガロイヤルホテルで盛大に開催、無事に終了しましたことをご報告すると共に、ご協力戴きましたことを厚くお礼申し上げます。

さて、この時記念品として、お渡しした和製タオルに不具合がありました。

注文したタオルは、左右に門女・北高の校章をあしらった物で、回りを白い萩の葉で囲む筈でしたが、納品された物は萩の葉がないものでした。北高のデザインは、昭和29年校旗制作の話があり、全校生徒による図案の募集に、当

時2年生であった玉田幸生(北高7期)さんも応募し見事1位に選ばれた作品でした。

詳しくは玉田さんが執筆した「100周年記念誌掲載の『校旗意匠デザイン』制作の思い出」をお読み下さい。

尚、門浪会会報の表紙には玉田さんのデザインしたものを掲載しました。

## \*\*\*\*\* 門浪会会報配布について \*\*\*\*\*

門浪会会報は予算の関係もあり原則として次回からは会費納入者に限り送付致します。

但し、卒業10年未満の会員は希望者のみと致します。

\*\*\*\*\*

平成19年度門浪会主要会務報告				
年	月	日	内 容	備 考
19年	5月	3日	記念行事資料各支部発送	案内状、会員券、払込取扱票1450セット
	5月	12日	100周年記念行事本部説明会	各期幹事出席、資料配布及び説明会 学習センター
	8月	24日	18年度会計監査	
	8月	25日	当番期最終打ち合わせ	最終期別及び来賓出席名簿に基づく
	8月	5日	座席表作成	当番期
	9月	8日	前夜祭	ゴルフ競技会、エクスカージョン(関門レトロ及び北高体育祭見学)
	9月	9日	100周年記念行事	19年度総会終了後祝宴 於小倉リーガロイヤル
	10月	20日	北高100周年記念行事	於小倉ホテルクラウンパレス
	12月	21日	北高・門司高校同窓会会議	両校廃合後の新設県立門司学園高校覚書き成立
20年	1月	11日	100周年記念誌最終校正会議	於北高
	2月	29日	北高門浪会受入会式	於北高
	3月	1日	北高卒業式	於北高

## — 門浪会会報 創刊号 —

発行日／平成20年3月25日

発行者／門浪会事務局(門司北高等学校同窓会)

〒801-0803 北九州市門司区田野浦2-2-30

TEL 093-321-0813

印刷所／エポック株式会社

〒800-0039 北九州市門司区中町5-10

TEL 093-382-0400